

- 1 派遣期日 令和5年9月30日(土)
- 2 派遣先 仙台国際ホテル(2F平成の間)
所在地 宮城県仙台市青葉区中央4丁目
<https://www.tobu-skh.co.jp>
- 3 研修内容 【シンポジウム】
探究がもたらす児童・生徒の変容とは?~小中高の授業実践から学ぶ~
【ワークショップ】
サーブスイノベーション型PBL 体験ワークショップ
【パネルディスカッション】
学習・授業を”探究的な学び”にするには?~未来を創るこれからの学習~

4 感想

2022年度より高等学校で新学習指導要領が始まり、総合的な探究学習が注目されている。この新しい学習スタイルは、義務教育課程でも取り入れられ、課題の設定、情報収集と整理・分析、まとめ等、問題解決や探究の過程が重視されている。基本的な情報活用能力が不可欠とされる中、どうすれば効果的に探究学習を推進できるのか、学校現場の具体的な取り組みについて学んでいきたい。本セミナーでは、「学習・授業を探究的にするには」をテーマとして、探究的な学習を実践している学校の事例紹介の中からどのように探究的な学習を進めていくかを考える機会とし、新しい指導方法に対する理解と実践のきっかけとなればと考えている。

今回の研修は、教育委員会や教員向けに現状の学びに必要な「探究的な学び」を、シンポジウムやパネルディスカッションを通して、現状を踏まえながら考える内容でした。シンポジウムの始めに、これからの時代について、また考えに至った背景について説明があり、VUCA時代とは、「先行きが不透明で将来の予測が困難な状態」を意味する言葉である。VUCAとは「**Volatility: 変動性**」、「**Uncertainty: 不確実性**」、「**Complexity: 複雑性**」、「**Ambiguity: 曖昧性**」の4つの単語の頭文字をとった造語であり、アメリカとロシアの冷戦が終結した1990年代以降、まずは軍事用語として使用され始めている。「変動性」とは、価値観や社会構造の変化、テクノロジーの進化等によって、予測できないほどの大きな変化が起き得ることを意味する。「不確実性」とは、将来の見通しを立てることが難しい状況を意味する。「複雑性」とは、経済活動を中心としたグローバル化によって、地球規模で起こる課題が顕在化・複雑化していることを意味する。「曖昧性」とは、これまでの常識が通じない状態で、問題に対する絶対的な答えがなく、解釈の可能性が複数あることを意味する。

予測困難なこの時代を企業が生き抜くには、情報収集能力、思考力、行動力のスキルは必須となる。これから生きていくためには、不確定要素が多くありすぎて、過去の経験が役に立たない場面があると考えられる。データというのは、活用されなければただの無意味な数字にしかならない。人生100年時代と言われているからこそ、収集したデータを可視化して分析すること、PDCAサイクルに変わるフレームワーク、「**OODAループ**」が大切であると本セミナーで紹介されていた。OODAループは、先が読めない状況で成果を出すことを目指す意思決定手法であり、アメリカの軍事戦略家・ジョン・ボイド氏が開発し、以下の4ステップで構成される。

Observe (観察: このステップの目的は情報収集。ポイントは、現場を担当する者や意思決定をする者が置かれている状況、環境、市場動向といった事実だけではなく、関係者の気持ちや感情も、情報の一つとして収集すること。そのため観察をする場合には、先入観や常識に捕らわれずに、客

観的に観察すること。)

Orient (状況観察：観察によって集められたデータと自身の経験や知識を組み合わせ、今起こっていることを分析して解釈する。ここで重要なことは、前回の判断の誤りに気づくこと。)

Decide (意思決定：どのような結果を求めるのかを確認し、取り得る行動の選択肢をできるだけ多く出し、最適で効果的であるものを選択するというプロセスを踏むこと。)

Act (行動：意思決定した行動を実践する。実行した結果にとらわれることなく、ただ行動をやり抜くことだけに集中することがポイントである。行動をして得られた結果は次の観察の対象として評価され、状況把握を通して次の意思決定の判断材料となる。)

今回の研修では、様々な学校の授業実践を知ることができた。その中で共通して感じたことは、「主体性」「プロセス重視」「真正性」「PBL」の4つが挙げられる。

「**主体性**」は、「何をすべきか決められていないこと」に対し、自分の意思・判断により自らの責任をもって行動する態度や性質のこと。「**プロセス重視**」は、数値としての結果よりも問題発見から解決に至るプロセスを重視すること。「**真正性**」は、ある対象（人やモノ、データ、記録等）が、それが何であるかの記述や主張の通り、本物であること。また、本物であることを確実にしたり証明できる性質のことを指す。

シンポジウムの授業実践を観察すると、自宅学習から「収集→整理→分析」を行い、整理・分析を繰り返すことで知識が更新される姿、学びの探究結果発表を様々な人と共有することで企業と連携を図ること（「サービスイノベーション」）、探究のスイッチを入れるためにテーマを深掘りし、凝縮ポートフォリオを作成し、思考過程を見直すことで学習の行き詰まりを打開する様子が見受けられた。探究のゴールとして、新しい知識を獲得すること、「教え込む」のではなく、探究からの気づきを大切にしていること、実物とデジタルを組み合わせながら児童生徒が「あれしたい！」「これしたい！」と思った時に答えが出せる等、授業での探究的なアプローチをする上でのキーワードを多く知ることができた。また、子どもの発達の過程はひとつの活動や教材で見取れるものではなく、学校活動・学校生活全体を通して見出していくものなのだと考える。それは、学校の教育や学校生活全体のプロセスの中で、教員の眼差しによって「再発見」「再構築」されていくもので、「何をしているのか？(what)」ではなく、「なぜしているのか？(why)」という問いかけがあってこそ、プロセスが意味をもち、それが写真や動画でドキュメントされていれば、さらに意義あるものとなる。今回の授業実践を見て、思考過程の見直す大切さを考えるきっかけとなった。

最後に「**PBL**」は、日本では現在、文部科学省によって「アクティブラーニング」が推奨されている。PBLは、そのアクティブラーニングのうちの一つである。PBLは、1990年代初頭にアメリカの教育学者ジョン・デューイが唱えた学習方法である。PBLを取り入れた授業では、答えが複数ある課題について、自ら仮説を立て、調査し、検証するということを繰り返している。教員が教壇に立って板書し、生徒がそれをノートに写すという従来の授業とは大きく異なり、生徒が自ら課題を見つけ、その課題を解決するまでの過程でさまざまな知識を得ていくという学習方法である。後半の「パネルディスカッション」では、この学習方法を実践している学校の事例が紹介されている。児童生徒一人一人が幸せになるために、学校独自のカリキュラムマネジメントを行っている。本物に触れながら「問い」に対して場面設定を行い、選択場面を増やし、すぐに成果を求めない。ICT機器の活用、発展学習としてミッションに取り組み、子どもが試行錯誤する(Try&Error)。インプットしたらアウトプット、丁寧な振り返り(スタディサプリ、AI教材を含む)、意欲が続かない生徒には、段階的に手立てを講じ、好きなことから始める姿勢等、ゴールまでの仕掛けが数多く用意されていた。

今回の研修を通して私は多くの刺激を持ち帰ることができた。私は、これからも「自分ができること、できそうなこと」に挑戦し、今日の前にいる児童生徒のために試行錯誤をしながら実践に取り組んでいきたい。